

「さ・て・と、今から自販機の掃除をしてこようかの」  
徳平は笑って言った。

「あないにきれいに拭いて、まだ磨こうというんか？」  
徳平の一言に栄治はびっくりした顔をして反論した。

「え、徳さん、何を言うとな。今日はまだひとつちや自販機の掃除はしとらんで。一日に一遍はウチの稼ぎ頭をきれいにしてやらんどの」

「ははは……。冗談は言わんとしてや。今さっきタオルで拭いていたがな」となおも徳平が笑いながら続けると「今日は一度も拭いてないで。そっちこそからかわんといてや」と真剣に言った。徳平は栄治が本気で言っていることを悟り、笑っていた顔は固まり、顔色が青くなっていた。

徳平の人生も順風満帆ではなかった。やはり戦争で父親と家とすべての家財道具を失ってしまった。母親は身を粉にして働いたあげくに苦勞が重なり亡くなった。息子の清は高校時代に家出をして、今どこでどうしているかわからない。かみさんからは店の野菜のことでやり込められる。そして商売はいつも時代の景気風に翻弄されてきた。

徳平は口数が多いほうではなかったが、その時、その時のつらいことを栄治だけには打ち明けてきた。「大丈夫や。なんとかなるわ、徳さん」という樂觀的な言葉を聞くだけで、徳平は「そうや、今までもなんとなり、希望がわいてきた。

考えてみると栄治が徳平に愚痴をこぼしたことは

その晩、徳平はなかなか寝付けなかった。栄治の奇妙な言動が気にかかってしかたがなかった。徳平が栄屋に訪ねて行った時、たしかに栄治は独り言を言いながら自動販売機を拭いていた。それをまだ今日は一度も掃除をしていないと言い張る。

何度も思い出しているうちに、自分の方が幻を見たのかと錯覚するほどだった。しかし、確かに栄治は片手に殺虫剤、もう一方の手にはタオルを持って磨いていた。栄治はつい今さっきのことすら忘れるようになったのかと徳平は深いため息をついた。

老いに伴うあれやこれやの身体的、精神的衰えはどうしようもない。徳平自身も辿る道である。しかしまだそんな年ではあるまいに、あんなしつかりしていた栄治が……と思うと堪らなかった。

なかった。栄治の事を「えらい頼りになる男や」と思っていたが、栄治にだつて言いたいことがたくさんあったということを知った。わが身の鈍さが呪わしかった。

(栄治さんよ、おまえさんもつらかったんやろの) 徳平は哀しみが込み上げてきて布団の中で泣いた。泣くともますます感傷的になってきて、じつと暗い天井を見上げ、眠れずにいた。

ふと階下の店でごとりと物音がした。最初は空耳かと思ひ、さらにじつと耳をすませていると確かに何かの音がする。

(まさか、ど、泥棒か。盗るものもないところになんて来るんや) とひやりとしたが、気持ちを落ち着かせようと深呼吸した後で、隣りでいびきをかいて寝てい

るかみさんのパジャマの袖をそつと引っ張った。

「ううん、どしたん、うるさいな」

かみさんは袖を振り払って向こうに寝返ってしまっ

た。徳平はかみさんの背中にささやいた。

「おい、物音がせんか。下に泥棒が入ってるような：

…」

かみさんは眠そうな声で一蹴した。

「そなはずがあるもんな。ウチに入るような物好きの泥棒がおつてたまるかい」

「しつ。ちよつと聞いてみい」

しばらくするとかみさんがガバツと起き上がった。

「ほんまや。泥棒や。あんた、そこらへんに棍棒はな

いか」

「それより電話や。警察に電話をせんと」

「電話は一階にしかないで」

「あ、そうか」

徳平もかみさん同様に、こんなひなびた店に盗みに

入る泥棒はいない、とたかをくくっていたので、かみ

さんが言うところの棍棒に類するものなど置いてい

ない。徳平はたった数千円のことと殺された他県の

強盗殺人事件を思い出して、日頃からの備えをしてい

なかったことを悔やんだ。しかたがないので、電気

掃除機の柄をそつと抜いて、ないよりましと、それを握

り締めた。

「おい、下の様子を見てくるで」

「あたしも行く。あんた一人じゃ頼りないけん」

夫婦は手探りで音がしないようにそつと階段を降り

ていった。たしかに物音がしている。耳をそばだてて

みると物音はやつと聞き取れるほどの押し殺した声に変わった。

徳平はいきなりパチツと店の電灯のスイッチを入れ、

恐怖心を押さえつけて「こらー、誰やー」と大声を出し

た。

突然の明かりに泥棒は目がくらんだようだった。徳

平も同じだ。しかし目が慣れると、背後からかみさん

が叫んだ。

「あんたは、まー、清、清やないか。いったいどこ

から入ったんや」

徳平は目をぱちくりさせて、店にいる男を見た。

背が高く、痩せて不健康そうな顔色をしている四十

半ばらしき男だ。じつくりと見るとまぎれもなくその

顔は息子の清だった。

手首には金の鎖、ピンクのシャツに薄汚れた白いス

ーツ姿。いかにも中途半端なチンピラ崩れといった

風体をしている。驚いたことに幼い子どもが清のス

ーツの袖口をしっかりとつかんでいた。

清は照れたようなあいまいな笑いを浮かべた。

「とうちゃん、かあちゃん、しばらくだな。『勝手知っ

たる自分の家』で入るのは簡単だったぜ。シャツター

もないとはな、相変わらず貧乏臭いな」

かみさんは徳平を押しつけて前に出た。

「な、なにが『しばらく』や。ふいと出て行ったまま、

親を死ぬほど心配させおつて、何十年もたつてひよっ

こり現れてのんきに『しばらく』だけで済まそうとい

うんか」

かみさんの激しい口調に反発してか、清は途端に

ふてぶてしい投げやりな態度になった。

「けつ、久しぶりに会った最初の言葉が説教かい。なんにもそれだけで済ませようとはまだ言っていないだろう」

「やつと声が出せるようになった徳平は、かみさんの後ろから言った。

「ほんまに、ほんまに、なんちゅうか……。あきれたやつちゃ。今の今までどこで何をしとったんや。それに、その子はなんや」

清はきざつぽく肩をすくめた。

「ちえつ、じじいまでばあお尻馬にのって文句かよ。まあ、話すとき長いが、一口で言えば『いろいろ』あったんだ。でも、たいしたことはない、ということもな飲んで来たんだが、実はこの子のことで困っている」

清はきざつぽく困つてもいないような風に言った。そして袖口を握っている子どもの手をぞんざいにどけて前に押しやった。子どもは背格好からみて三歳くらいで、親指をくわえ、上目遣いで徳平夫婦を疑わしそうに見詰めている。帽子をかぶって隠しているつもりらしいが顔はうす汚れていた。半ズボンをはいてよれよれの迷彩色のTシャツを着ていた。

「この子はな、えーと」

清が言いよんどんでいる間に、徳平とかみさんは場違いな雰囲気の子どもをよく見ようと身を乗り出して近寄っていくと、子どもは口元を真一文字に結び、後ずさりした。

「うーんと、まあ、なんと言うか、どうやら俺の子どもらしい」

『あしし』……』

徳平とかみさんは同時に声を発した。

「ちよつとの間、一緒に暮らしていた女が産んだ子なんだ。この女がもう浮気者のしょうがないやつで、子どもが生まれたので一応籍は入れたのによ、さつそく離婚届を置いて、ちよつと前に出て行きやがった」「しょうもないのはあんたの方やろ。はつきり言うとな、その人に見限られたんやな」

かみさんは唾を飛ばさんばかりに辛らつに言った。

「うるさいな。まあ、何でも言え。それでな、しばらくは俺がこの子の世話をしていたんだが、どうにもこうにもやつつかいで、もう面倒をみるつもりはない」その途端、子どもは清の顔を不安そうに見上げながら再び清のスーツの袖口をつかもうとしたが、清は

邪険にさつと手を払いのけた。

(以上2月27日放送分)